

「底が突き抜けた」時代の歩き方 303

「世界はもっと豊かだし、人はもっとやさしい」筈なのに...・映画『A2』

前作『A2』に続く森達也監督の映画『A2』は、圧倒的に面白かった。現在のオウムが置かれている状況をカメラで追っただけであるのに、目を瞠るほどの面白さであった。もちろん、映画の面白さは、オウムという宗教組織の不可解さに容赦なく迫ろうとするカメラの踏み込み方にあることは間違いない。少なくともこの映画から、我々がいまのような社会の不安のなかに揺らめいているかがくっきりと読み取れる。と同時に、カメラはもし覚悟さえするなら、ギリギリのところまで踏み入ることができるものだという思いを改めて噛みしめた。映画を観る前と観た後で自分の何かが変わることなど到底考えられないが、この映画は映像の中でギリギリまで踏み込んでいるだけでなく、映画の観客にまで踏み込まずにはおかぬカメラの迫真性と自在性を獲得しているのが感じられる。優れたドキュメンタリー映画がそうであるように、この映画もまた、映像を通して現場を目撃することになってしまった胸騒ぎをたっぴりと味わわせてくれる。

映画パンフには、カメラが映しだしている各々の光景をストーリーとして解説しているので、そのまま次に転載しておく。

《2000年10月。横浜の一軒家。「宗教団体アレフ」の広報部長に就任したばかりの荒木浩は、躊躇がちに「A」以後の心象風景を語り始める。それは、地下鉄サリン事件直後よりも、むしろこの一年のほうが社会からの憎悪や排除を痛感し、辛い日々だったとの告白だった。

1999年10月、群馬県藤岡市。倒産した印刷工場とその社長のかつての自宅に、多数の信者が移住した。工場施設前に常駐する群馬県警。更にそれを包囲する住民たちの監視小屋。施設責任者は、その挑発的な言動で、地域住民から最も恐れられている幹部信者だ。施設内を案内しながら、執拗な森の質問に根負けしたように、最後に本音を明かす。「もしあの時私がサリン散布を命じられたら？ 撒きますよ。グルの命じたことには従うべきです。」

工場から数キロ離れた社長宅では、ふたりの信者が退去の準備に余念がない。敷地内に設置されたプレハブ小屋は市の正式な監視団。隣接するテントは、かつて信者が乗る車を襲撃したり施設への投石をくりかえすなどして、「住民たちの過激派」と呼称されるボランティアの監視グループが常駐している。しかしこの日、信者たちはテント内で談笑の時間を過していた。笑い声が敷地に絶えず、最後にはとうとう並んで記念撮影が始まる。そんな和やかな様子を、正規の監視団と警備の警官が、遠巻きに苦々しそうに

眺めている。

オウムと対話をくりかえす彼らに対して、行政や他の住民たちが暗黙のうちにプレッシャーをかけてきて、テント小屋解体の日がやってきた。「オウムが来たことで行政の矛盾がよくわかった」と憤慨する男たち。取り壊されるテント。解体に協力する信者たち。その周囲で戸惑うマスコミ。裸足でサンダルの信者に、釘に気をつけろと住民たちが声をかける。電気の供給を絶つことを破産管財人に宣告された信者に「凍え死さないか」と案ずる男。「孫に似ている」と写真を撮りながら笑顔の老婦人。

社長宅退去の日。解体したテント小屋の住民たちが、続々と施設前に集まってくる。分配されるオウムの書籍。「皆さん最初は怖かったですよね」と言う信者に「こっちはお前らが怖かったんだよ」と笑う男。「信じた道を真っ直ぐに進め」と励ます女。施設内のゴミ捨てに、先を争って協力する住民たち。その周りを徘徊するテレビクルーや新聞の記者。しかしこの光景が報道されたことは、これまでに一度もない。「どうしてマスコミはこれを報道しないんだよ？」と一人の住民に詰問され、地元紙の若い記者はただ苦笑い。

長野県木曽福島。この地にある施設「蓮華」で、信者への監禁・暴行容疑で一人の幹部信者が逮捕され、更に強制捜査の際に複数の衰弱した信者が保護されたと報道された。オウム新法成立の大きな推進力になったこの事件だが、出所した当の加害者と被害者のひとりと伝えられた二人の信者が、慌しい引越し準備の合間に、にこやかに真相をカメラの前で語り始める。

2000年1月、横浜市中区。出獄した元幹部・上佑史浩が漂着したマンションは、住民たちに包囲されて騒然としている。一群の右翼の活動家たちが上佑との会見を求めて警備の警官と交渉を始める。「警察やマスコミを通して話を聞きたくない。俺たちは直接オウムと対話をしたいだけなんだ。」しかし警備を理由にこれを拒絶する警察。ついに封印していた街宣車が、機動隊の隊列に突入する。

その数日後、横浜の繁華街を市民運動よろしく徒歩でデモ行進を始める右翼民族派の一団。「オウム死ね！オウム出て行け！などの言葉は絶対に禁句。彼らを此处から追い出すことだけが私たちの本意ではない」という申し合わせが事前にあった。いつもとは勝手が違い、戸惑いながらも隊列を崩さない活動家たち。

右翼活動家たちの情熱はオウムに受け入れられた。一人の幹部信者との面会を許されたのだ。森が執心していた藤岡の工場施設責任者だ。デモの翌日、藤岡に向かう彼らに森も同行するが、撮影するのなら同席は遠慮して欲しいと拒絶される。

横浜施設。上佑史浩との対話。一同に揃う幹部たち。しかし会見の内容はやはり偏向して全国に伝えられる。「この流れに自分ひとりが抵抗しても無理なんです」と真情を吐露する大手新聞社の週刊誌記者。押し黙り唇を噛み締めながら宙を仰ぐ荒木浩の姿。

茨城県大子町。地元の事業家が温泉ボーリング工事のためと称して信者を雇い入れ、町ぐるみの大騒動が始まっていた。夜間の闇に乗じて現れた幹部信者。メディアや住民たちに脅えたその姿には、藤岡での挑発的な気配は伺えない。町役場の幹部たちに囲まれ激しく罵倒されて「どんなに理解されなくとも、われわれは謝罪と被害者補償を続けてゆくしかない。出て行きます」と唇を噛み締めながら宣言する。

社長宅を退去した信者を、大学時代同じサークルに所属していた若い新聞記者が訪ねてきた。しかし会話は微妙に擦れ違う。信者を案ずる友人や家族の様子を伝える記者。解脱について語る信者。「どうしてよりによってマスコミという仕事を選んだの？」と信者が詰問し、「なんで今も教団にとどまるのか理解できないよ」と記者は反駁する。

千葉県流山市。信者たちが住宅街の一軒家に移住した。排除を訴える住民たちの隊列が街中を練り歩く。しかし施設内では、外の様子に無頓着な信者たち。訪ねてきた鉢巻姿の住民たちに対話を望むが、これを拒絶して機械的にデモを終息させる住民たち。

場面は再び冒頭の一軒家。カメラを足許に置き、劣悪化するばかりの今の社会とオウム双方への不満、そして自らの煩悶を、一方的にぶつけて肩を落とす森に対し、無言で同意する荒木の突き詰めた表情。「消えてしまえばいいのでしょうか？ 消えられないですよね…」

茨城県三和町。反対集会の住民の群れに包囲された荒木。厳しい怒号に反論しようとして、更に激しく罵倒されて絶句する。意気揚々と引き上げる住民たち。悄然として施設の鍵をかける信者たち。

…この先いつまで、こんな光景がこの日本でくりかえされるのだろうか？ 信者たちの後姿が少しずつ遠ざかる。》

以上のストーリー解説で抜けているいくつかの印象的な場面があるので、それを拾っておきたい。まず藤岡市の施設を退去して（確かそうだったと思われるが）、横浜の施設に住み始めた信者がカメラを気にしながら、この辺りは性風俗が盛んだから性欲が高まって困ると森監督に恥ずかしそうに語る場面である。「オナニーをするとエネルギーが下がるので、やらない」と答える信者に、「夢精は？」と問いかけ、「しばらくなかったのに、横浜に来てまたするようになりました」と返答して、「これまずいですよ」と信者ははにかむ。この場面は前作の『A』のラストで当時の荒木広報副部長が、自分がまだ女性の手を握ったこともないことや、したがって童貞であることを恥ずかしそうに語るシーンを想起させる。

テレビで映しだされたヘッドギアスタイルの修業風景も撮られている。本を置いた譜面台のようなもの前にあぐらをかいて座り、麻原被告の録音されたテープ（であろう）に合わせて唱えられていく。簡単に済まされる粗末な食事風景も映しだされており、一見ただけでも食欲が起きそうにない丼鉢の食べ物を、信者たちが今日のはおいしいと口に放り込み、勧められた森監督が、これはすごくまずいよ、というと、え、本当ですか、と意外そうな反応をする信者たち。

一般社会へのオウムの対し方の幼稚さが露呈されていたのは、オウム幹部が松本サリン事件の被害者である河野義行宅に、謝罪文を手渡しに行くシーンである。『アエラ』（02.4.22）で森達也を取り上げたノンフィクションライターの藤井誠二は、このシーンについて次のように書いている。

《森のカメラの他に数台のマスコミのカメラを帯同する。オウムに破防法を適用することなどに反対してきた知識人らもいっしょだ。この「謝罪シーン」はマスメディアでも放送されたのだが、『A2』ではそのシーンの前と後の「余白」をすべてノーカットで使っているため、まるで茶番劇のような印象を観る者に与えた。

それは、オウムの謝罪文がまるで謝罪になっていないことに河野が不快感をあらわにしたことにより、謝罪文をどう書き直せばいいのかわからず子供のようにおたおたするオウム幹部たち、そこにアドバイスをする知識人、「その部分は使えないから」といったんカメラを止めるテレビクルーらの一挙一動をひょいと世に出してしまったからなのだ。

この「絵」に映り込んでおり、やはりオウムを長期にわたって追ひ続け、森の作品を高く評価するテレビディレクターの磯貝陽悟は、「仲間なのにヒ首をつきつけるやつ」と苦笑する。

「普通は、オウムが河野さんに謝罪するシーンだけを流すのが、ジャーナリズムのお約束。だけど森君はあたま撮りからすべてを使う。掟破りなんだなあ」

森は件の謝罪シーンについて、「河野さんはセレモニーとして割り切って受け入れているのに、オウムはあの程度の認識しか持ち合わせていない、お粗末な人たちなんだということを伝えたかった。でもそれは凶暴さとは違う。そして、あそこにいた河野さんを除いた、僕も含めた誰もがそんなオウムを利用していることを表現したかった」と確信犯であることを言明する。》

映画を観た私の印象では、河野さんはオウム幹部に来訪の用件を尋ね、謝罪文を手渡そうとする彼らに、「謝罪をしに来たのであれば、ここで謝って下さい。私自身は別に謝罪を望んでいませんが」というスタンスを一貫させており、「不快感をあらわにした」というより、オウム幹部たちのあまりもの未熟さを衝いていたのである。森監督が映しだしたのは彼らの幼さだけではなく、そのような幼さこそが松本サリン事件や地下鉄サリン事件を惹き起こす要因であることも浮かび上がらせていたと思われる。全国各地で激化したオウム排斥運動の裏面で映画が描写してみせたように、「脱会したら遊びに来いよう」とか「決めた道を進むことはいいことだからね」と住民たちから別れを惜しまれるのも、信者たちの無垢と幼稚性が発揮する無邪気さに引き寄せられていたから

ではなかったか。

森監督自身もいうように、映画が映しだすどの信者を取り出しても、そこには「凶暴さ」は見られず、一人一人の弱々しさが浮き彫りにされている。彼ら若者たちが「豊かな社会」の中で見失ってしまった「生きる意味」を求めて、オウムの扉を叩いたことは疑うまでもない。震災救援のボランティアに参加して、生き生きと活躍した若者たちが被災地に「生きる意味」を求めたのと同様であった。彼らは自分たちを受け入れてくれるところであれば、どこにでも飛び込んでいくだけの飢渴をかかえこんでいたと推測される。同じ受け入れてくれる場所であっても、しかし、オウムと被災地では決定的に異なった筈だ。いうまでもなく受け入れられるためには、当然ながら自分も受け入れなくてはならない。被災地で受け入れられた若者たちは、一体そこで何を受け入れたのだろうか。各人にとってそれはさまざまであるとして、多くの被災者やボランティアと接する中で彼らなりの「生きる意味」を受け入れたことは間違いない。それは、教祖や他の信者と接する中で「生きる意味」を受け入れていったオウムの若者たちと基本的に異ならなかった筈だ。

決定的に異なるのは、ボランティアの若者たちがやがて被災地を去らねばならなくなって、そこで見出した「生きる意味」を別の場所に向かわせなくてはならない困難さにたえず直面していたのに対して、オウムの若者たちがオウムの中で受け入れた「生きる意味」は、オウムから離れさえしなければずっと与えられつづけるという点にあっただろう。なるほど被災地で受け入れた「生きる意味」は被災地以外の場所で持続させることは困難であり、被災地を離れた途端に無くしてしまうようなものかもしれない。しかしながら、そのような「生きる意味」であっても、オウムの中でしか見出されないような「生きる意味」よりははるかによかった。なぜなら「生きる意味」は与えられるものではなく、結局のところ自分の手で掴み取る以外に術はないことを被災地は教えていたが、オウムは与えつづけるばかりで、そのことは教えなかっただろうからだ。

「生きる意味」がオウムに入会することでしか見出せないものであったなら、信者たちがオウムから離れられなくなるのは道理であった。誰もが目の前に押し迫ってきているようにみえる選択肢に直面しながら、自らの意志を小さく働かせて一つの途に踏み入っていくのであるから、信者たちがオウムの中で生きていこうとすることもまた、一つの生存のありかたにほかならない。しかしながら、宗教が「生きる意味」を現世の次元からどれほど離脱させようとも、教団の形態をとることによって現世と否応なしにつながっているし、信者たち一人一人の身体そのものが現世に属している。要するに、サリン事件などによってオウムは現世につながれ、全国各地での地域住民による排斥運動などによって現世からの撤退をしいられている。信者たちは好むと好まざるとにかかわらず、オウムが施してくれる「生きる意味」の中に、現世との付き合いかたを繰り込んでいかざるをえなくなっているのだ。

映画『A 2』は地下鉄サリン事件以降のオウムに対する排斥運動を映しだしながら、本当はオウムが惹き起こした無差別集団殺人事件によって拒絶反応を激しく露わにしている現世の人々に対する接近の仕方を、オウム幹部のみならず個々の信者たちはどのよ

うに宗教上の課題としているかを容赦なく抉りだそうとしていたと考えられる。もう少し突っ込んでいえば、現世の混沌と迷妄から一筋の光のように生みだされてきた筈の宗教が、母胎としての現世に対してどのようなまなざしを注ぎ、どのように接するのかという問題であった。いいかえると、現世との軋轢^{あつれき}によって無数に生じる現実的な矛盾の一つ一つに、宗教はどのように向き合うのかという問題であった。文学にとっての真の課題が非文学的な領域に溢れ返っているように、宗教にとっての真の課題もまた、非宗教的な領域に溢れ返っている。オウムという宗教は、非宗教的な領域にどのように踏み入ろうとしているのか。

松本サリン事件の被害者である河野義行宅に、オウム幹部が謝罪文を手渡しに行き、河野さんから何をしに来たのか、謝罪しに来たのであれば、いまこの場できちんと謝罪して下さいと静かに詰問されてうろたえる場面は、オウム幹部が、非宗教的な領域と真正面から向き合ったことがないことを物語っていた筈だ。身内の信者同士であれば、修行を通じた会話も成り立ったかもしれないが、河野さんのようなオウムの外にいる人の前では、全く一言も発することができなかったのである。つまり、「信」は「非信」に向かつては言葉を持たないのだ。もちろん、河野さんは単なる「非信」ではない。オウムの「信」の内部から散布されたサリンガスを身に被ってしまった「非信」である。このような「非信」に対してオウムが伝わるような謝罪の言葉を持たないということは、現世に還ってくる「信」を持たないし、持とうともしないことを意味していたにちがいない。

そんな「お粗末な人たち」が集まっているオウムを内から外から、あるいは内でも外でもないある虚点から撮影しようとする森監督は、オウムという宗教の中で揺らめく人間を映しだそうとしているのが、映画パンフに収録されている彼自身の次の文章から感じ取れる。

《前作「A」がクランクアップした97年以降、日本社会はまるで歯止めが外れたように急激に変質した。残虐で理解不能な犯罪が勃発し、ガイドライン法案や国旗国歌法案、通信傍受法案に住民基本台帳法案などの法案があっさりと成立し、一旦は棄却された破防法は団体規制法案（オウム新法）として復活し、タカ派的言動の政治家が支持されて、遂には太平洋戦争における日本のスタンスは正しかったと主張する勢力まで現れた。

全ては地下鉄サリン事件以降なのだ。

思いだして欲しい。僕らは事件直後、もっと煩悶していたはずだ。「なぜ宗教組織がこんな事件を起こしたのか？」という根本的な命題に、必死に葛藤をしていた時期が確かにあったはずだ。6年が経過した現在、オウムの側では今も葛藤は続いている。でも社会の側の思考は停止したかにみえる。「正と悪」との二元論ばかりが幅を利かせ、ひとつの刺激に対して全員が一律の反応を無自覚にくりかえしている。（僕らの父や祖父の世代は、そうして取り返しのつかない過ちを犯してしまったはずじゃなかったのか？）

葛藤を続けなくてはならない。煩悶を取り戻さなければならない。僕らはオウムの事

件からまだ何も獲得できていない。剥きだしになっただけだ。だからこそオウムをこんな形で風化させてはいけない。日本をこんな形で収束させてはいけない。

でも一年余りの撮影と数ヶ月の編集作業を終えて、よりによって初めての試写と宗教が関与した悲惨な事件が同時期に重なった今、つくづく思う。切ないくらいに思う。

「世界はもっと豊かだし、人はもっとやさしい」

結局は外したけど、「A 2」のサブタイトル候補だったこのフレーズの意味を、一人でも多くの人に伝えたい。僕らが今、後戻りのできない地点にまで無自覚に近づきつつあることを、一人でも多くの人に知って欲しい。難しいことじゃない。立ち止まり、これまでとは少しだけ違う視点で、ゆっくりと周囲を見渡してみればよい。

その瞬間、きっと誰もが気づくはずだ。》

監督森達也の文章の全文をここに転載したのは、共感したからでもなければ、否定したいからでもない。彼自身がいうように、ここで少し「立ち止ま」ってみたいからだ。「世界はもっと豊かだし、人はもっとやさしい」というフレーズは、“世界はもっと荒涼としているし、人はもっと残酷である、”という対極のフレーズの前でしか、意味を持たない。同じことの表裏にほかならないからである。「僕らは事件直後、もっと煩悶していた」か。いや、そんなことはなかった。衝撃の大きさに捉われていただけだ。我々はいつだって煩悶なぞ、してはこなかった。煩悶をしない生き方を戦後学び取ってきた筈だ。ただ煩悶の振りはしてきたかもしれない。一度でも本当に煩悶をしてきたなら、煩悶はますます深まるばかりで、風化に晒されることはありえない。

オウムの側も全く同じだ。オウムでいまでも続いているようにみえる葛藤は、事件以降より一層激しくオウムを受け入れようとしない外側の人々の排斥運動からもたらされているものであって、彼らの教義が現世と接触するところで生じる矛盾に立ち向かう中に育まれているようには全くみえない。映画『A 2』はそのことを余すところなく映しだすが故に、逆に非常に示唆に富んでいたのではなかったか。この映画のカメラはオウムの内にも外にも、どこにでも踏み入ろうとする容赦のない問いと化しているが、先の一文はこのカメラに密着するところで書かれているとは思われない。カメラは身をもって踏み入っているが、その一文は踏み入っているわけではない。だから、この一文は問いで成り立ってはいない。カメラはオウムと地域住民の排斥運動の双方のダメな部分に踏み入っているが、一文はむしろ遠ざかっている。「その瞬間、きっと誰もが気づくはずだ。」というとき、はたして「その瞬間」が訪れてくるということがあるだろうか。「誰もが気づく」という奇跡のようなことが起こりうるだろうか。

2002年5月16日記